

街路に形成された中間領域が始まる位置と影響を及ぼす構成要素の推定

日本大学	学生会員	○ 渡辺 万紀子
日本大学	フェロー会員	天野 光一
日本大学	正会員	西山 孝樹
東京コンサルタンツ株式会社	非会員	掛谷 頌悟

1. はじめに

わが国の都市部では、外部空間と内部空間の間に中間領域が存在する。そこで本研究では、その中間領域の始まりの位置といずれの構成要素がその形成に影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

日本大学理工学部の学生 19 名に対して、50 枚の実験写真を提示する実験 1 を行った。本実験で用いた実験写真は、店舗入口（入口が無い場合はそれに相当する場所）から直線を引き、等間隔に番号を設けた。被験者は中間領域の始まりとを感じる場所に人形を置き、その位置を整理した。なお、実験で使用した写真は建物 1 階部分が商業施設かつ前面に机や商品などが浸み出しているにもかかわらず違和感が無い商業施設を選んだ。さらに、実験 1 で明らかにした構成要素の詳細な影響を精査すべく、学生 39 名に対して 26 枚の実験写真を提示する実験 2 を行った。実験写真は、実験 1 で得られた結果をもとに、各構成要素の影響を判別しやすい写真を選定し、実験 1 と同一の手法で実験を行った。

3. 研究結果

実験 1 の結果では、中間領域の形成に影響を及ぼす構成要素は、「活動」「商品」「椅子・机」「看板」「オーニング」「敷地境界」の 6 要素と推測された。これをもとに、実験 2 では 6 要素の構成要素を要素同士で組み合わせたり、各要素が単独で存在させたりするなどの加工を行い、各構成要素が中間領域の形成に影響していることを明らかにした。なお、中間領域の形成に影響を及ぼす構成要素の外側付近を被験者がその中間領域の始まりとするのは、各 6 要素で一様にみられた。この条件を中間領域の始まりと評価するのは常識的であるため、この結果以外の特徴を各構成要素ごとに述べることにした。

(1) 活動

「活動」の要素には「関連活動」と「行列」の 2 種類が存在した。「関連活動」とは、その店舗の営業や業務に直接的に関連する活動を指す。その「関

連活動」で被験者が中間領域の始まりと評価したのは、対象店舗に関連する「活動」と重なる位置であった。例えば、八百屋で野菜の品定めなどを行う「活動」では、その野菜を品定めする活動と中間領域の始まりの位置が重なって評価されていた。つまり、被験者は実験写真内でみられた「関連活動」、ここで言う野菜を品定めする活動と重なっていた。これは、山水画などの絵画作品でみられる「臥遊」に近い代理自我が起り、被験者が仮想行動を想起したと推測される状況にあった。

一方の「行列」は、飲食や売買の待ち行列を指す。この「行列」が存在する場合は、先の「関連活動」とは異なり、評価にばらつきがみられた。被験者がその「行列」に加わる仮想行動を想定した場合と「行列」を構成する人々をモノとして認識した場合に別れたと考えられる。そのため、「行列」により中間領域が形成された場合、その評価にばらつきが生じたといえる。

(2) 椅子・机

「椅子・机」の構成要素に着目すると、図-1 の様に人が椅子に座っていない場合は中間領域が始まる位置の評価にばらつきがみられた。その一方、図-2 の様に人が椅子に座っている場合は、「椅子・机」の最端部を中間領域の始まりと評価した被験者が増加した。

椅子に人が座っている場合、被験者は実験写真中に存在する人に対して、代理自我が生まれて仮想行動が働いたとみられる。その結果、中間領域が始まる位置の評価は、「椅子・机」の最端部付近に集中した。また、椅子に人が座っていない場合は、仮想行動を想起させる対象が実験写真中に存在していないため、代理自我は生まれず、中間領域の位置を評価する際に迷いが生じ、その評価がばらついたり考えられる。

(3) 看板

図-3 のように、「看板」のみで中間領域を構成している場合、被験者は看板正面またはその最端部を中間領域の始まりと評価した。また、「看板」の向き・形態・論理情報の内容に合わせて中間領域の始

まりが評価されていることもわかった。この結果から、「看板」は論理情報を提供する装置であり、その論理情報を詳細に受け取る必要がある場合は「看板」の読める位置、「看板」の端や正面を中間領域の始まりと評価した。

また、図-4 にみられる「処方箋受付」など、論理情報を詳細に受け取る必要がなく、一目で「看板」の情報を認識できる場合は「看板」を単なる物体として認識していた。そのため、被験者は「看板」の最端部を中間領域の始まる位置と評価したとみられる。

(4) オーニング

被験者は、「オーニング」の最端部またはそれによる影を中間領域の始まる位置と評価した。しかし、被験者が評価したその「オーニング」の最端部またはそれによる影の境界付近に(1)で示した「関連活動」があった場合、中間領域の評価が大きくばらついた。これは、中間領域が始まる位置の評価に「オーニング」と「活動」の各要素が別々に影響を及ぼしたといえる。

(5) その他

図-4 は、中間領域を構成する各要素が離れて位置している写真である。被験者は、「看板」を眺めたり、「商品」を品定めしたりするなど、自身の仮想行動を離れて位置している要素ごとに選ぶため、中間領域が始まる位置の評価にばらつきがみられたと推察される。

4. まとめ

本研究では、中間領域を構成する構成要素の存在を明らかにし、各々の構成要素において、中間領域が始まる位置を整理した。その結果、中間領域の始まる位置を構成するのは「活動」「商品」「椅子・机」「看板」「オーニング」「敷地境界」の6要素であった。また、被験者が中間領域の形成に影響を及ぼす構成要素の最も外側付近を中間領域の始まりと評価したのは、各6要素で一様にみられた。

さらに、中間領域が始まる位置は仮想行動によって評価された。「行列」が中間領域を構成する要素として含まれる場合を除き、実験写真の中に人がいる場合、被験者には代理自我が働き、その仮想行動に準じて中間領域の始まりの位置が評価された。

一方、実験写真中に人がいない場合、被験者は自身と重ね合わせられる対象が存在しない。そのため、代理自我が働かない仮想行動が想起され、中間領域が始まる位置の評価にばらつきが生じることがわかった。

5. 参考文献

渡辺万紀子・天野光一・西山孝樹：街路空間における中間領域に関する基礎的研究，景観・デザイン研究講演集，pp.285-290，No13，2017。

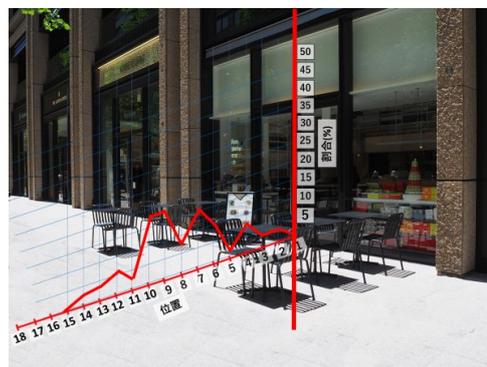


図-1 「机・椅子」に人が座っていない場合の中間領域が始まる位置の評価



図-2 「机・椅子」に人が座っている場合の中間領域が始まる位置の評価



図-3 「看板」のみで中間領域を形成する場合の被験者による評価の分布



図-4 「看板」を単なる物体として認識した場合の被験者による評価の分布